
コミュニカティブ・アプローチの理論的背景について

山名 豊美

1. はじめに

コミュニカティブ・アプローチとは、コミュニケーション能力の育成を主眼とした英語（外国語）教授法であり、1970年代から英米を中心に広まってきた指導法の総称であって、英語では、communicative approaches と複数形で表記される。日本でも、さほど遅れることなく注目されるようになり、控えめに見ても、20年近くの歴史を持つことになる。その間、世界的な規模で人々の交流が進み、共通語としての英語の重要性がますます高まってきた。日本でも、中学、高校、大学を通じて、これまでの文法・訳読中心の英語教育からコミュニケーション能力の育成を中心とした英語教育への転換が叫ばれて久しい。

これまでも、オーラル・メソッドやオーラル・アプローチと呼ばれた音声言語を主体にした教授法が提唱され、熱心な教師たちによって実践されてきたが、すべての教室の授業内容を変えるにはいたらなかった。現実には、多くの教育現場では、相変わらず、文法訳読方式の授業が続けられていると言っている。しかし、状況は徐々に変わってきているように思われる。中学では、AETの指導が普及し、高校では、オーラル・コミュニケーションが必修となった。そこでは、必然的に文法訳読方式の授業は不可能になり、多くの教師がコミュニカティブ・アプローチの考え方を取り入れた教材を使うようになってきている。今日、コミュニカティブ・アプローチが広い支持をうけている最大の理由は、その基礎となっている理論の有効性にあると考えられる。ここでは、コミュニカティブ・アプローチの基盤となった、いくつかの理論的枠組みについて、もう一度整理してみたい。

2. 言語習得理論

コミュニカティブ・アプローチ（以下、CA と表記する）以前にもオーラル・メソッドやオーラル・アプローチなど、音声言語を主体にした教授法が提唱され、実践されてきた。それらもまた、コミュニケーション能力の育成に主眼を置いているということでは、CA の一種と考えることもできる。しかしながら、オーラル・アプローチに理論的基盤を与えた構造言語学では、言語を習得するということは、習慣形成の一種であり、その過程は『刺激＝反応』理論によって説明されると考えられていた。その結果、授業の最も重要な部分が、パターン・プラクティスに代表されるような、音声形式の反復に費やされることになった。音声に慣れるという点では、それなりの効果があった

にせよ、コミュニケーション能力の育成という点では目標に遠く及ばなかった、と言わざるを得ない。

今日、CA が英語（外国語）教育の中で主要な地位を占めるようになったのは、基盤となる様々な研究の成果に負うところが大きい。中でも言語習得に関する研究が進んできたことが大きな要因となっている。言語習得理論の発展のきっかけを作ったのは、言うまでもなく、チョムスキーの提唱した生成文法理論であり、そこでは、言語は人間が持っている生得的な能力の一つであり、そのメカニズムを解明することが言語学の使命とされた。最初は、母国語（第1言語）の習得に関する研究が進み、それにともなって、第2言語の習得に関する研究も進んできた。

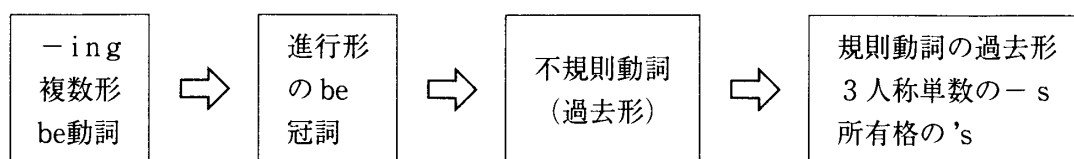
言語習得に関する研究の中で明らかになってきたことは、第2言語の習得が第1言語の習得と非常によく似たプロセスをたどるということであった。かつては、母国語の干渉によって、外国語の学習が妨げられるという例がとり上げられ、第2言語の習得は、第1言語の違いや個人により、全く異なるプロセスであると考えられていたが、今では、第2言語の学習上の誤りの多くが、過剰な一般化など、第1言語の習得時に見られるものと同様に、発達上の誤りとして説明できることが判った。これを、さらに一歩進めて、言語の習得プロセスには、第1言語と第2言語に共通する、『自然な順序』があり、学習者は、与えられた言語材料を『入力』として、理解しながら、言語能力を獲得していくと主張したのが、Krashen である。次の章では、彼の提唱したナチュラル・アプローチについて検証してみたい。

3. ナチュラル・アプローチ

CA を形作っている理論は一つではない。その中には、言語学、社会言語学、言語心理学など、様々な分野の成果が持ちよられていると言ってよい。中でも、Krashen によって提唱されたナチュラル・アプローチは、その後のCAの考え方に大きな影響を与えた。ここでは、Krashen (1982) に従って、その理論の大筋を見ておこう。

Krashen による主張の中でもっとも重要なものは、『自然順序の仮説』(natural order hypothesis) と『入力の仮説』(input hypothesis) と呼ばれているものである。自然順序の仮説では、人が言語を習得する過程には、文法項目毎に特定の順序があつて、その順序は誰でも共通であるとされている。例えば、第2言語としての英語では、Duray and Burt(1974)をはじめとする多くの研究の結果、以下の図のようになると考えられている。

図1



自然順序の仮説が正しいとして、次に問題になるのは、一体、どのようにして、新しい文法項目を習得していくことができるのかということである。言い方を変えれば、我々は自分がまだ知らない文法項目を含む文に出会った時、どうやって、それを理解することができるのかということである。Krashenによれば、それはそれまでに身につけた文法的な知識に加えて、文脈に関する情報や一般的知識を使うことによって可能になるという。つまり、図1を使って説明すると、一番左側の囲みの中の文法項目、例えば、進行形の中の-ingを習得した者は、次の囲みの中の文法項目、例えば、進行形の中で使われているbe動詞を正しく理解し、身につけることができるということである。このプロセスは言語を習得していく者にとっては、極めて自然なもので、逆に言えば、ある段階に達している者は、次の段階にある文法項目を含む文に接しさえすれば、それを習得することができるということになる。これをKrashenは『入力仮説』と呼んでいる。

もし、入力仮説が正しいとすると、言語を学習してゆく過程でもっとも大切なことは適切な入力に接することである、ということになる。これを、言語教育の立場から裏返して見ると、教師の最も大切な仕事は、文法項目を説明することではなく、これから習得するはずの文法項目を含む文を提示することである、ということになる。この時、注意しなくてはならないのは、言語を習得するのは、言語を習得しようとしている人間の内面的なプロセスであり、教師が、直接、指導したり教育したりできるものではない、ということである。Krashenは、習得(acquisition)と学習(learning)という語を使い分けることによって、両者の区別をしている。そして、第1言語であれ、第2言語であれ、実際のコミュニケーション能力の獲得は、無意識的な習得のみによると主張している。

無意識的な習得によってのみ、コミュニケーション能力の獲得や向上が可能であると考えた場合、意識的な学習によって身につく、文法的な知識は、コミュニケーションの場では、全く役立たないのだろうか。これについて、Krashenは、『モニター(monitor)仮説』を提案している。これは、学習によって得られた知識は、実際の発話がなされる前後にモニターとして、使われるという仮説である。この仮説によって、作文など、口頭でのコミュニケーションに比べて、より多くの時間を使うことができる状況では、一般的に、文法的な誤りを犯す率が少なくなるという現象が説明できる。しかしながら、listening-speakingから成り立つ、オーラル・コミュニケーションに限ってみると、モニターはほとんど役立たない、というのがKrashenの結論である。はたして、Krashenの言うように、習得と学習がそれほど明確に区別できるかどうかは別にして、この仮説によって、日本人の多くが、文法的な知識が十分あるにもかかわらず、コミュニケーションができないという事態をうまく説明することができるように思われる。

これまで見てきたように、Krashenのナチュラル・アプローチでは、コミュニケーション能力の獲得に関する限り、第2言語(=外国語)であっても、第1言語(=母国語)と同様なプロセスをたどると考えられ、コミュニケーション能力の育成をはかるならば、『自然順序の仮説』や『入力仮説』に矛盾しない教材を開発することが重要になってくる。次章では、教材を開発する際の基礎となる、シラバスについて、Wilkins(1972)の主張をもとに、考えてみたい。

4. 概念シラバス

ここで言うシラバスとは、言語教育における教授項目をリストアップしたものであり、教材を作る基本となる目録のようなものである。これまでは、文法訳読方式の場合はもちろんのこと、コミュニケーションを目的とする授業であっても、我々が手にする教材の多くは、文型や、名詞、代名詞、形容詞などの品詞、あるいは、時制や条件法といった文法項目が、それぞれの課に割り振られていた。そのようなシラバスは、文法シラバスと呼ばれ、これまでの言語教材の、言わば、唯一のよりどころであった。文法シラバス（以下、GS と表記）がコミュニケーション能力の育成に有効であるのかないのか、まだ結論づけられたわけではないが、Wilkins は、これまでの GS に代わって、CAをより効果的に進めるシラバスとして、『概念シラバス』(notional syllabus)（以下、NS と表記）を提案した。Wilkins (1972) は、GS の問題点として、2つのことをあげている。第1は、GS が、文法を一つの体系として取り扱うために、全ての項目を、重要性に関わらず、一律に取り扱わざるを得ないことである。その結果、学習者は、各文法項目に関する知識を時間をかけて、積み重ねていかなくてはならないし、学習の途中で、それまでに身につけた知識を使ってコミュニケーションしようとしても、それを活かすのは著しく困難である。さらに、第2の問題点として、GS では、意味よりも形式に重点が置かれることをあげている。これは、GS の性格上、避けられないことだが、実際のコミュニケーションの場で使われる文が、形式を規準に選ばれたりしない。このことは、コミュニケーション能力の獲得を目的にした言語教育には、GS では対応できないことを示している。

GS に代わって、Wilkins が提案したシラバスは、概念、言い換えれば、話者が伝えたいと思う意味内容、を中心に、それを表す形式をそれに従属する形で扱おうとするものである。そして、それを組み立てるもとになる範疇として、「時間」「数量」「空間」等をあげている。これらの概念は、GS でも取り扱われてきたが、ここでは、形式ではなく、意味をもとにしている点が異なる。さらに、それぞれの項目には下位範疇があって、たとえば「時間」の下位範疇には「継続」や「頻度」などの項目がある。GS の中では「継続」は「時制」の、「頻度」は「副詞」の下位部分として扱われるのとは、自ずと違った扱いになる。

NS では、これら以外にも、「確実性」などの法的範疇や、「同情」「感謝」などの感情に関係した範疇が提案されている。これによって、例えば、「確実性」を表す文法項目として、can, may, must 等の助動詞と同時に、sure, certain, likely といった形容詞が一つの範疇として、とりまとめることができるようになった。現実的なコミュニケーションを想定した場合、これらの語彙が同時に出現することは、自然なことであり、NS が GS より優れていることを示す一つの例であると考えられる。

Wilkins は、言語教育の全ての局面で、NS が GS にとって代わると言っているわけではない。むしろ、短い時間にコミュニケーション能力を身につけたいと願っている者を対象にしたコースに有効であり、初心者を対象にした、より包括的なコースをつくるには、さらにコミュニケーションに関する知識が深まる必要があると言っている。

5. おわりに

Krashen のナチュラル・アプローチの中で提示している『自然順序の仮説』や『入力仮説』によって、外国語教育をこれまでの文法訳読方式で受けてきた場合、コミュニケーション能力を身につけるのは、ほとんど絶望的だったという事実と、海外移住など、ある特定の環境で、大人になってからでも第二言語（外国語）の運用力を身につけることができるという事実をかなり良く説明することができる。これを現実に応用すれば、教室内でも、外国語を使う必然的な環境を作りさえすれば、コミュニケーション能力を身につけることができることになる。

さらに、Wilkins の提唱した概念シラバスでは、教材を意味内容を中心にして構成することによって、限られた制約の中で、より自然なコミュニケーションに近い状況を設定できることが分かった。

今日の英語教育において、CA に期待されている役割は大きい。これまで、日本人の多くが願いながら叶わなかった、英語によるコミュニケーション能力の獲得が可能になるのではないかと感じさせるものがある。しかしながら、理論的に正しいとしても、それを実践に移すには、様々な困難が予想される。クラスの人数や機器などの物理的な問題から、教師と学習者の関係など人間的な問題まで、理想的な状況を作り出すまでには多くの時間と費用がかかることだろう。しかしながら、英語を使えるようになりたいと願い、学習する者がいる限り、我々教師にはその努力を無駄にさせない責任がある。日々の授業での活動が、本当にコミュニケーション能力を向上させるのに、役立っているのか、CA の観点から、もう一度見直すのに、本論が多少でも役立てば幸いである。

（やまな とよみ 社会福祉学科）

参考文献

1. Brumfit, C. J. 1984, *Communicative Methodology in Language Teaching* Cambridge University Press.
2. Brumfit, C. J. and K. Johnson (eds.) 1979, *The Communicative Approach to Language Teaching*, Oxford University Press.
3. Krashen, S. D. 1982, *Principles and Practice in Second Language Acquisition*, Pergamon Press.
4. Wilkins, D. A. 1972, Grammatical, Situational and Notional Syllabuses, in Brumfit and Johnson (eds.) 1979, p. 82.

The Theoretical Backgrounds of Communicative Approaches

Toyomi Yamana

Since 1970's communicative approaches have been widely accepted in the field of ESL/EFL teaching. Over the last two decades more and more people have been learning English as a means of communication. In Japan communicative approaches have also become the most influential methodologies of language teaching. The reason of the wide practice of communicative approaches comes from the validity of the linguistic theories which underlie the communicative approaches.

In this paper we consider the two most important ideas which has contributed a lot to the development of the communicative approaches: Krashen's 'natural approach' and Wilkins's 'notional syllabus'. Though the process of language learning is not still fully explained, these ideas about language teaching must be incorporated in developing better courses.

Key Words: communicative approaches, natural approach, notional syllabus